

2025年7月13日聖霊降臨後第5主日説教

申命記第30章9～14節

コロサイ書第1章1～14節

ルカによる福音書第10章25～37節

本日の三つの聖書日課から学ぶことは、律法と愛についてです。本日の特権はそのことを良く示しています。「神よ、あなたを愛し隣人を愛することに律法のすべてはかかっていると、あなたは教えてくださいました」という文言は、教会の最も基本的でまた大切な教えが何であることを示しています。また、「聖霊の恵みによって、私たちが心を尽くしてあなたを愛し、まことの愛をもって人々と互いに結ばれ生きることができますように」という文言は、その教えを実行するためには人間の努力のほか、聖霊の恵みが必要であることを示しています。また、その歩みの目標が、人々つまり世界とのまことのつながりをつくりあげることであると示しています。

冒頭で律法と愛についてと申しましたが、旧約日課は、おもに律法について教えています。ことに律法を実践することについてです。「**私が今日命じるこの戒めは、あなたにとって難しいものではなく、遠いものでもない**」（申30：11）、「**その言葉はあなたのすぐ近くにあり、あなたの口に、あなたの心にあるので、あなたはそれを行うことができる**」（申30：14）は、律法と戒めは、数多くありますが、その一つひとつが、決して達成困難な課題ではないことを示しています。モーセ五書にある律法であれ、聖書ではありませんが、ユダヤ教の口伝律法であれ、確かに人間が実行不可能なものではありません。

それでは、そのように律法と戒めを守る目的は何か、「それは、あなたがあなたの神、主の声に聞き従って、この律法の書に書かれている戒めと掟とを守り、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に立ち帰るからである」（申30：10）とある通り、主なる神様に立ち返るためです。そう言われますと、人間だけが一方的に努力するように求められているように思えますが、そうではありません。まず、主なる神様が人間を愛しておられるということが大前提にあります。律法を守るとはその愛に応える手段にほかならないのです。

本日の旧約日課ではありませんが、旧約続編のエズラ記（ラテン語）3章7節に「**あなたは彼に一つの戒めを与えましたが、アダムはそれを破りました。そこで、あなたはすぐにアダムとその民を死に定められました**」とあります。アダムの罪などといわれますが、最初の人間アダムがたった一つの戒めも守れなかったのが、人間が守りやすくするために、より生活に密着して数多くの律法があるということです。

さて、これが律法に関する基本的事柄といえます。本日の福音書の物語も、そのことを前提としています。本日の箇所は、よきサマリア人の譬えとして

有名です。しかし、物語の前半（ルカ 10：25-28）にあるのは、マタイやルカの平行箇所と同じく、最も大切な教え・律法についてのお話です。ルカ福音書は、その後にもお話を展開させ、そちらが有名になっているのです。またそれゆえに、このお話では、隣人愛が主題であると解釈されることが多くあります。

隣人愛は大切な事柄ですが、聖書の教えもイエス様の教えも、そして本日の特祷も、律法が主なる神様の愛に応える方法であることからわかる通り、主なる神様を愛することを忘れてはならないのです。その両方が大切なのです。主なる神様を愛さなければ、人間は、愛とは何かがわからないからです。

申命記は、律法を実践することは、それほど大変なことではない。そのように断言しています。確かに、そうです。しかし、その簡単さゆえに、人間の尺度でその実行内容が定められてしまう場合があります。これぐらいでよいでしょうという判断、あるいは、一つの状況に、どの律法を適応するかという判断です。本日の福音書のイエス様のたとえにある、「祭司」、「レビ人」の行動は、一般的によく解釈されるように、「祭司」「レビ人」という宗教的に特別な存在の人であるからこそ、「汚れ」に触れないという律法的判断を優先した結果でしょう。律法を実践しなかったわけではないのです。もちろん、そのような判断は、主なる神様を愛するという視点があれば、決して許される事柄ではありません。それゆえにイエス様の問いかけがあります。

「この三人の中で、誰が追い剥ぎに襲われた人の隣人になったと思うか」（ルカ 10：36）。

このイエス様の問いかけが教会に求めるものは、確かに、サマリア人のような実践です。もっとも、日本という風土では、困っている人を見捨てる人は少ないと思います。しかし、世界中で今、苦しみや悲しみの中にある人々を、すべて隣人と捉えるとき、その隣人に手を差し伸べることの困難さに直面します。それゆえに、隣人愛を実践するとしても、特祷にある通り、聖霊の恵みによらなければ、その実行は困難なのです。使徒書は、「**主にふさわしく歩んで、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善い行いによって実を結び、神をますます深く知るように。**」（コロ 1：10）そのように述べています。わたしたちが祈りつつ、そのように歩むとき、聖霊の助けは必ずあると思います。

教会は国の行政ではありませんから、できることは限られます。しかし、教会だからこそできることはあります。誰かの隣にいる、それだけでも、多くの悲しみを防ぐことができるかもしれません。またはるか離れた人とは、物理的に一緒にいることは不可能ですが、祈りを通じてともにいることはできます。それはわたしたち自身がコロナ禍から教えられたことです。そのような歩みから、主なる神様を愛するからこそ生まれる隣人愛の実践が出てくるのだと思います。わたしたちの教会ならではの実践を、これからも深めていきたいと思っています。